

「へすび柿」

かき

おかしむかしなあ、ひとりのおばあさんが、川原で、まっ黒にかわらよごれたなべの底を、ごしごしとたわしでこすってやはったんや。おばあさんの手、なべすみがついてまっ黒けや。

前の畑には、赤い柿の実がかきいっぱいなり、お日さんの光があたって、うまそうやった。

「ああ、こんでなべがきれいになったわい。やれやれ。」

と、おばあさんが腰を上げると、ひとりのみすぼらしいかっこうのこし旅人が、しょんぼり立ってやはった。
たびびと

ほの旅人は、

「おばあさん、この柿をひとつください」

と、手を合わせ、しんけんに頼まはったんや。

「あ、いくつでも食べとくなはれ。」

というて、おばあさんは、なべすみのいっぱいいた手で、そばの柿をもぎとって、ほの旅人かきにあげはったんやて。

旅人は、たいへん喜んで、何べんも何べんも御礼をいうて、
立ち去らばったんや。

旅人というのは、弘法大師様で、困っている人や弱い人を助ける
ために、貧しい旅人の姿にかえて、あっちこっちを回っておられた
そうや。

そのことがあってから、杉野の村の柿は、へびす柿といって、
なべすみのついた様に黒いあざのある柿になったということや。

今も、このへびす柿は、杉野の村に、たくさんなるんやで。

「きのもとのおかし話」木之本町教育委員会より